

オースチンのまなざし



主教 小林 尚明

小林先生、お帰りなさい

3月5日(月)、徳島インマヌエル教会の信徒マリヤ野村三四(みよ)さんの葬儀に出席しました。三四さんは、大正3年4月生まれだったので「三四」と名付けられたそうです。103歳の年齢でした。

私は1987年神学校を卒業して、徳島にある富岡キリスト教会に赴任しました。1998年に広島に転任するまで、時々三四さんとはお目にかかっていました。そして18年ぶりに、2016年に今度は徳島インマヌエル教会の牧師として徳島に帰ってきました。三四さんは、徳島市の佐古にある徳島聖トモテ教会の少し西にある吉田外科に入院されていていました。101歳。早速お見舞いに行きますと、冒頭の「小林先生、お帰りなさい」とご挨拶していただき、こちらの方が恐縮してしまいました。18年ぶりというのに私のことを覚えて

えていてくださったのです。そして「ありがたいなあ、もったいないなあ、先生が私をお見舞いに来てくださった」とベッドに横になって、手を合わされます。「帰ってきましたよ。またお世話になります」と手を握りますと、三四さん「大きな優しい手。八代斌助主教様の手みたい」とおっしゃる。八代斌助主教様は、かれこれ47年前に逝去されていますから、三四さん、八代主教様の手のぬくもりを覚えておられるんだらうと、思った次第です。

再度

昨年11月12日(日)、徳島聖トモテ教会の巡回日。教会にお邪魔する前に三四さんのお見舞いに行きました。「主教様が私をお見舞い下さるなんて、もったいないなあ」ととても喜ばれて、握手をするともまた「八代斌助主教様のような、優しい大きな手」とおっしゃる。偉大な八代主教の足元にも及ばないような者ですが、八代主教様の持つておられた「やさしさ」だけはマネしたいと思ったことでした。

葬儀は芳我秀一司祭と長田吉史司祭が行われていました。式の途中、三四さんが「小林先生、主教様のお仕事、頑張ってくださいね」と励ましてくださったというようにでした。(神戸教区主教)

国連女性の地位委員会報告

国連女性の地位委員会。その本会議に合わせて世界中から女性が集まり、様々なイベントが開催されるUNCSDWが3月9日〜23日、ニューヨークで開催された。参加者登録数は世界各国から一万人。この期間UNは一年で最も活気にあふれる2週間になるといふ。

今回のテーマは「ジェンダー平等と農漁村の女性と少女のエンパワメントを達成するための課題と機会」。九州教区の安村妙さんと共に、全世界聖公会派遣団、17か国計25名の一員として参加することとなった。

聖公会・超教派の礼拝と交わり、政府・国際機関・NGO主催のイベント参加。ニューヨーク教区日本人ミッション教会訪問及び発表。聖公会主催イベント「気候変動、信仰と女性」ではパネリストとして参加。日本の気候変動・自然災害が多発している状況。九州教区での熊本地震と九州北部豪雨のボランティア報告。気候変動で起こりうる原発の危険性と原発反対。また

自分は気候変動からのボランティアを通して、現在は被災地に移住し女性として解体業をしていることなどを発表した。

イベントは2週間に460個。毎日イベント表とにらめっこしながら様々な会場を渡り歩く。途上国では女性の日々の重労働、性器切除、強制幼少結婚、レイプ、度重なる紛争、学校に行けない子どもたちのことが語られ、その悲惨な状況に絶句した。途上国の皆は「教育が必要である」と言った。

聖公会アジア太平洋ミッションの交流会では、一言ずつ感想を述べよ、とのこと「教育が必要である」と言うが、学校教育を受けている私たちには何が必要なのか。私は韓国で農業をし、女性としても色んな苦労をしたが、韓国の女性たちはこう言った「教育を受けるべきは男性である。」「男性には教育を、女性には立ち上がる勇気を。」と締めくくったところ、大喝采が起きたのはなぜ故か。この会議に参加するにあたり、日本聖公会の農村活動を調べたが、皆無に近かった。神戸教区の教会のほとんどが所謂田舎に存在する

にも関わらず、教会として活動がないのは残念である。「農」とは人間が生きていく上で必要なものだと考えるからである。



この会議に参加して、文化や慣習に埋もれて見えなかった差別に気付くことができた。女性が作る礼拝や各国の女性との出会いにより、自分の固定観念が見事に打ち破られた。毎年派遣されるこの会議に、今後自ら行きたいと名乗り出る女性が神戸教区から出るように願っている。

(中村 香・神戸聖ミカエル教会信徒)